

パンツ落下注意につき

とりの

かくれんぼ

大半がぼんやりとした記憶です。

所々鮮明に思い出す事ができるのが、幼少時の記憶の面白い所ですね。

あの時の母の顔や、あの時背伸びした視点の変化ははっきりと覚えています。

だから、夢ではないのです。

4つや5つの時の夢を今も記憶しているはずがありませんから。

私の生まれた家は田舎の古い家です。かくれんぼが十分楽しめるだけの広さがありました。造りはしっかりしていましたが、木で造られた家は湿度や温度で膨張したり縮小したりします。隙間風が入ってきたり、天井からチラチラと空の青さがのぞいたりしていたものです。

私と妹はその日、お風呂に入る前にかくれんぼを始めました。

子供の頃は楽しさのスイッチがいつ入るか判りません。

脱衣所でスカートを脱いだらお気に入りのパンツをはいていたから、というのも理由だったかもしれせん。

5匹の犬が、繋がった5台の1人乗り飛行機にそれぞれ乗っているイラストがバックプリントされた、可愛いパンツ。

鬼になったのは妹でした。じゃんけんで決めたのか、姉の特権で鬼を押しつけたのかは覚えていません。

まあ、じゃんけんで私が勝ったのでしょう、きっと。

半袖とパンツという装備で、隠れ場所を探しました。

家の中で見つからない場所というのは決まっていて、階段の途中にある真っ暗な物置きスペースと、各部屋の押し入れです。なぜ見つからないかと言うと、1人で探しに行くのが怖いのでなかなか見に行かないから。

物置きスペースは明かりも無く自分の手も見えないような闇ですし、押し入れは古い家なので「ふすま」が日に焼けて変色しており、中には先祖代々詰められてきたと思しき子供には判らない古い物がぎゅうぎゅうに入っていて不気味です。どちらも狭い隙間に体をねじこんで、小さく丸まって隠れます。

隠れるのも怖いけれど、探しに行くのも怖い、そんな場所。

姉としてカッコいい所を見せたい私は、あえてその場所を選びました。

とはいえ、階段の方に行く勇氣はありませんでした。物置きスペースに行くまでの道のりすら怖い、小心者の姉でしたから。

そうなれば目指すは押し入れです。同じ押し入れでも部屋によって怖さが違います。やはり、遺影が飾られた部屋の押し入れが一番怖い。私が我慢出来ると判断したのは、両親の部屋の押し入れで

した。

押し入れの上の段

両親の部屋に入ると、押し入れは二つ。ふすまが4枚並んでいます。遠くから聞こえる妹の声に急かされながら、どこに隠れるか悩みました。奥のふすまの中は荷物や洋服が詰まっていてとても潜りこめません。手前のふすまを開けると、下の段は荷物でいっぱいでしたが上の段は布団が収納されており、多少の余裕があります。

ここだ！

何とかよじ登って、重ねられた布団の上まで行きました。薄暗くちょっと湿った押し入れの中はもうそれだけで十分に怖く、諦めそうになります。

しかし、私はお姉ちゃんだから妹なんかに負けない！という闘争心がある以上気合いの入り方が違います。

妹によるカウントダウンはどんどん進み、そこへ母親の「いいから早くお風呂に入りなさい！」が重なります。向こうは明るいなあちょっと寂しく感じつつ、ふすまを閉めました。ぴっちり閉めないと私が開けた事がばれてしまう、とは思いましたが、密室にしてしまうのは怖くて我慢できず、ほんの少し隙間を作っておきました。ほんの少しの明かりを入れるためと、外の様子を見るためです。

「もーお いーい かーい」

妹の声が聞こえます。私達のルールでは、ここで返事をする声の方向から隠れ場所がばれるので、返事が無ければ準備ができているというルールになっていました。

ばたばたと走る音に、再び母の「お風呂に入りなさいってば!!」が重なります。ちょっと怒っていると察知した私は、押し入れの中が蒸し暑い事もあって半袖とパンツを脱いでしまう事にしました。

見つかったらすぐにお風呂へ直行すればいいのだから、と。

薄暗い中でまず半袖を脱ぎ、パンツを脱ぎました。

しかしここで事件発生です。脱いだ拍子に、布団と押し入れの壁の隙間にパンツが落ちてしまったのです。

パンツを無くしたら怒られる！

そう思った私は必死で布団と壁の間に腕を突っ込み、短い腕でちいさなパンツを探しました。狭くて暗い押し入れの中、孤軍奮闘です。今になればそんなものは後で親に拾ってもらえばいいのですが、とにかく怒られるのが嫌で怖くて、必死でした。

しばらくの格闘の末、指先に布団以外の布が触れました。驚掴みにして引き上げるのとふすまが勢いよく開け放たれ

「いつまでもなにやってんの！」

という母の怒声が響いたのが同時でした。驚いて固まる裸の私を見た母の方が驚いた顔で「裸で何をしてるの……」と脱力しました。まったく、何をやっていたのでしょ。我ながら。ええ、かくれんぼをしていたんです。鬼である妹は先にお風呂へと離脱してしまいましたが。

重なった布団を崩さないように気を付けてずるずると降り、母に続いて部屋を出ました。ぺたぺたと廊下を歩きながら、必死で掴んだお気に入りのパンツを広げます。結局怒られたなあと思いつつながら。

「……あれ？」

落ちた犬

違和感がありました。

お気に入りのパンツには犬が5匹いて、みんなそれぞれ繋がった小さな飛行機に乗っていました。すごく楽しそうに。

私はそのパンツを脱いで、布団と壁の隙間に落しました。

そして、拾い上げたのです。

私のパンツが何枚も押入れの隙間に詰まっている訳は無いので、確実に同じパンツです。

けれど。

私が広げたパンツには、

4匹の犬が飛行機に乗り、最後の1匹は飛行機にぶら下がるようにして引っ掛かり、落ちそうになっていたのです。

無事な4匹は後ろを心配そうに見ています。ぶらさがった1匹は、泣きながらこちらを見ていました。

あれ？なんで？これ、私のはいてたパンツじゃない……

そんなはずは無いのです、はいていたパンツ以外にあり得ないのです。けれど、絶対にイラストが変わっている。

幼い私の出した結論は、

「わたしがぱんつをおとしたから、いぬさんもおちちゃったんだ！」

でした。この時のショックは今でも覚えています。怖いのと、不思議なのと、ごめんなさいの気持ちでした。

どうしようか少し悩んだ後に私が取った行動を、今でも覚えています。

自分が使っている大きなタンスの一番上には、小さな引き出しが2つ付いていました。子供の手がギリギリ届く位置で、中に何が入っているのかは見えないくらいの高さでした。

私はそのタンスの前に行き、一番上の引き出しの左の方をつま先立ちでなんとか開け、放り込むようにして犬のパンツを隠したのです。

悪事は隠したくなるのが子供の性、犬に悪い事をしたと思った私は、自分の目の届かない所にパンツを封印しました。無くなったパンツに母は気付かなかったようで、特に何を言われるでもなくパンツはその後もその引き出しに封印され続けました。

しばらく経ち私の背がささやかに伸びた頃、一番上の左の引き出しを開けてみました。

そこには入れられたままの状態が眠っていました。やはり、4匹の犬に見守られたまま1匹は飛行機にぶら下がっていました。

そのまま引き出しに戻したはずですが、私が大きくなって母がタンスを整理したのか、いつの間にか犬のパンツは消えていました。

飛行機に登って、5匹で笑顔のパンツに戻ってくれた事を祈るばかりです。